

1) 他のグループの発表を聞き、自チームにはなかった参考になった点

他のグループの発表を聞いて、自チームの提案にはなかった新しい視点として特に印象に残ったのは、「技術や仕組みを活用して人の注意力を補う」という考え方である。

「特に注意が必要な場所を光らせることで事故ゼロの街を目指す」という発表では、危険な交差点や通学路、見通しの悪い場所をセンサーや LED などで可視化し、ドライバーや歩行者に直感的に危険を伝える仕組みが提案されていた。これは、事故の原因を個人の不注意だけに求めるのではなく、「注意し続けることが難しい人間の特性」を前提に環境を整える発想であり、非常に現実的だと感じた。自チームでは主に子どもの行動特性に着目していたため、道路や設備そのものが注意を促す仕組みは大きな学びであった。

また、「仮想通貨の視点から交通性を考える」という発表では、一見すると交通と関係が薄いように思える分野を組み合わせ、移動や交通行動に価値を与えるという新しい発想が示されていた。例えば、安全な行動や公共交通の利用、徒歩での移動に対してポイントや仮想的な価値を付与することで、人々の行動を自然に変えていくという考え方は、自チームにはなかった視点である。ルールや罰則で縛るのではなく、「行動

したくなる仕組み」を作ることの重要性を学んだ。

2) 自チームの提案を整理し、地方都市の交通問題を総合的に解決するための意見

自チームでは、未就学児・小学生の歩行中の飛び出し事故が多いという問題に対し、子どもの発達段階や行動特性に注目して解決策を考えた。子どもは視野が狭く、周囲の状況を十分に把握することが難しいため、大人と同じ交通行動を求めることには限界がある。そのため、事故防止には「子どもが飛び出しても重大な事故につながりにくい環境づくり」が必要であると考えた。

ここに、他グループの発表内容を取り入れることで、提案はより総合的なものになる。まず、「危険箇所を光らせる」という発想は、通学路対策と非常に相性が良い。例えば、子どもの通行が多い時間帯に横断歩道や交差点が光る仕組みを導入すれば、ドライバーに対して「ここは特に注意が必要な場所である」というメッセージを強く伝えることができる。これは、注意喚起の看板よりも即効性があり、地方都市のように車利用が多い地域では特に効果的だと考えられる。

次に、「仮想通貨・ポイントの視点」を取り入れることで、交通安全や歩行を前向きな行動として評価する仕組みを構築できる。例えば、徒歩での登下校や安全な横断行動、地域の見守り活動への参加などに対してポイントを付与し、地域内で使える仕組

みを作ることが考えられる。これにより、交通安全が「守られるもの」から「参加すると得をするもの」へと変わり、子どもだけでなく大人の意識改革にもつながる。

さらに、地方都市の交通問題を考える上では、自動車中心の生活構造そのものを見直す必要がある。歩行者が安心して歩ける環境は、子どもだけでなく高齢者や障がい者にとっても重要であり、公共交通の利用促進や健康増進にもつながる。歩いて移動することに価値を与え、安全で楽しいものに変えていくことが、長期的な事故減少につながると考える。

地方都市における交通問題を総合的に解決するためには、①道路や設備などのハード面、②教育や意識づけといったソフト面、③行動を変えるための仕組みづくり、の三つを組み合わせることが重要である。未就学児・小学生の飛び出し事故対策は、その象徴的な課題であり、事故ゼロの街を目指す取り組みは地域全体の暮らしやすさの向上にも直結する。今回の授業を通して、交通問題は単なる安全対策ではなく、まちづくりそのものの課題であると強く感じた。